

1949年から柏崎栄助は福岡市に定住します。福岡は1943年に結婚した安永たゑの出身地でもあり、柏崎にとっても縁の深い土地でした。同地を拠点に柏崎は福岡、九州の各地で幅広い活動を展開していきます。

1950年代頭に、柏崎は、長崎県窯業指導所（現・長崎県窯業技術センター）において五島白土活用を目的とした素地、釉、デザインの研究に参加しています。1960年代半ばには、福岡県立農業試験場筑後分場（現・福岡県農林業総合試験場筑後分場）においてイグサの加工に関する試験を指導し、多色の花筵を生み出しました。戦前から交流のある福岡特殊硝子株式会社（現・有限会社マルティグラス）とも協働を続け、1970年頃には「ゆれる器」の商品化に取り組んでいます。その他にも「南国宮崎産業観光大博覧会」（1954年）や福岡県福島工業試験場の竹製品デザインなど広範に活躍しています。

この時期に柏崎が関与したデザインには公立の試験場に関わるものが多かったことは当時の状況を考えるうえで重要なことでしょう。国策として産業の発展が図られるなか、「官」のデザイナーが大きな影響力をもった時代の様子がうかがわれます。

また、柏崎は教育現場でも活躍しました。福岡学芸大学（現・福岡教育大学）や九州産業大学等で教鞭をとり、多くの後進を育てました。加えて、福岡教育大学卒業生による「紙造形研究室」を作り、より実践的な学びの場を生み出しました。のちにメンバーをひろげ「かみ研」と改名されたこのグループでは、どんな現場でも「生きていくための」学びが重視されたと言います。

福岡の柏崎を考えるうえでは「NIC^{ニック}」も忘れてはなりません。NICは1966年から97年まで天神の福岡ビルにあった総合インテリアショップで、ギャラリーやカフェも併設し、高度経済成長を受けて消費文化が爛熟していく福岡において、新しい生活空間のスタイルを発信しました。このNICに柏崎は深く関わり、その作品もNICで手に取ることができました。

さらに柏崎は九州クラフトデザイナー協会や九州デザインコミッティなどの立ち上げにも携わっており、その活動は非常に多岐に渡ります。製品開発・販路拡大、流通網やデザイナーのネットワーク整備、そして教育にいたるまでの多彩な活躍と、その高潔な人格のため、1986年に76歳で生涯を閉じたのちも、今なお多くの人々が柏崎を慕い続けています。